広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	東広島市新建遺跡採集資料報告
Author(s)	川島, 尚宗
Citation	広島大学埋蔵文化財調査研究紀要 , 15 : 1 - 14
Issue Date	2024-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/55040
URL	https://doi.org/10.15027/55040
Right	
Relation	

東広島市新建遺跡採集資料報告

川島尚宗

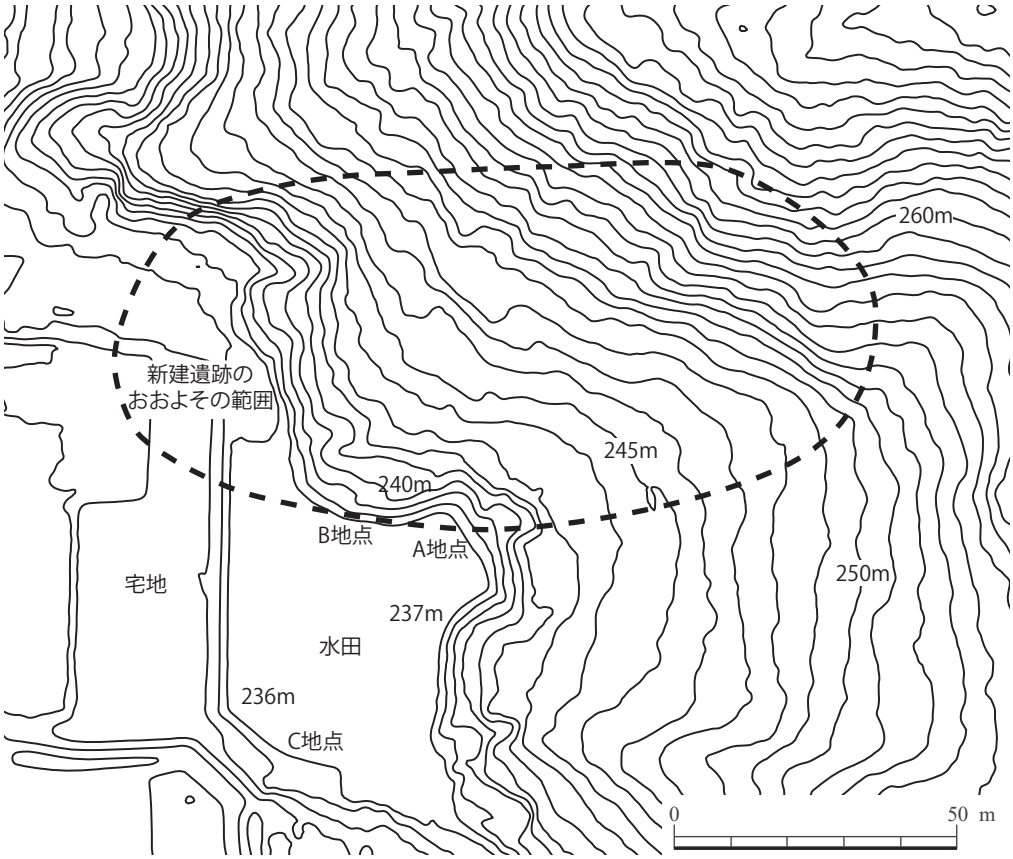
1．はじめに

昨年度の紀要において、広島県東広島市助実所在の新建遺跡採集の漆容器須恵器瑳の報告をおこなった。当該資料を含む新建遺跡の資料は、当館元職員の吉井宣子氏により 1994 年に採集されたものである。本稿では、既報告以外の資料を報告する。

新建遺跡は西条盆地の北東部に位置しており、隣接する水田面の標高は約 236m である（第 1・2 図）。資料採集地点は、西へ延びる丘陵端部の浅い谷奥にあたる（写真 1）。吉井氏によると、斜面部が崩落した部分から資料を採集したとのことである。2022 年 11 月に吉井氏とともに現地を確認した際には、谷奥状の地形部分より湧水が確認された。東広島市教育委員会に遺跡範囲を確認したところ、資料採集地点の周囲が包蔵地となっている。資料採集地点は、吉井氏によってＡ

第 1 図　東広島市新建遺跡周辺図（地理院タイルに遺跡位置を追加して作成）

（1. 新建遺跡、2. 丸山神社古墳群、3. 丸山神社裏遺跡、4: 松賀古墳、5: 松賀山遺跡、6: 浄福寺遺跡、7: 龍王山古墳、8: 京塚古墳、9: 卯月城古墳群、10: 助平 3 号遺跡、11: 三ッ城古墳群、12: 前長者遺跡、13: 長者スクモ塚古墳群、14: 平木池遺跡、15: 陣が平西遺跡、16: 山中池南遺跡第 2 地点）



第 2 図　新建遺跡各地点位置図（広島県インフラマネジメント基盤より作成）

写真 1　新建遺跡 A・B 地点（南より）
（中央奥が A 地点、右が B 地点）

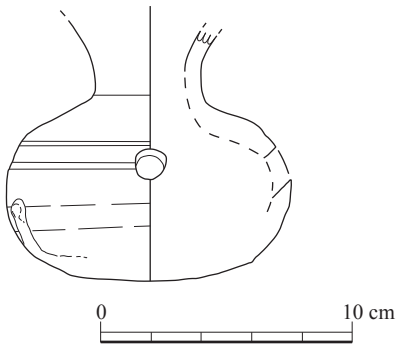
～ C 地点に区別されている（第 2 図、写真 1）。今回報告する資料はすべて A 地点において採集されたものである。土器と同封のラベルには、「新建遺跡 940123」などと記されており、すべて同日に採集されている。吉井氏の採集時のメモでは、A 地点において、表土の下に 1 ～ 1.5m の明黄褐色粘質土、暗灰色砂粒混じり粘土が 1.2 ～ 1.5m の順に堆積し、その下に赤色・灰黒色の互層が確認されている。明黄褐色土には遺物は含まないとされ、須恵器は暗灰色砂粒混じり粘土層から採集された。この層には、木炭・木片が含まれていたと記述されている。これらの状況から、暗灰色砂粒混じり粘土層が灰原に相当するのではと推定されている。B 地点は、A 地点から西に 20m ほど離れた地点で、水田の区画整理時に削られた斜面部にあたる。近世以降と思われる甕が採集されている。A 地点よりも時期が新しいとのメモが残されている。C 地点は、A 地点からみて水田の反対側、南東隅あたりの畔であるが、1 点のみ原位置ではないと思われる土器片が採集されている。これらの情報を考慮すると、A 地点が遺跡主体部近くに位置していると思われる。

新建遺跡周辺の古墳時代遺跡については、昨年度の報告を参照されたい（川島 2023）。土器の実測・トレースは、当部門技術補佐員の江本凜・鈴木小晴・山崎瑞季（50 音順）が担当し、写真撮影は川島がおこなった。

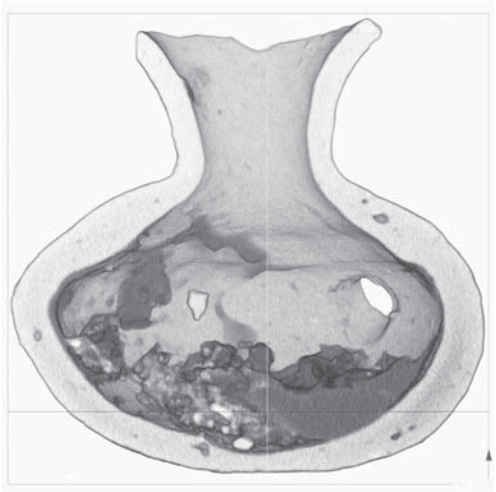
2. 新建遺跡採集資料

漆容器須恵器（第 3 図、写真 2）については昨年度報告しているが、若干の補足をおこなう。漆容器須恵器は、頸部半ばより上位を欠損する瓶である。残存高は 11.0cm、体部最大径は 11.3cm、頸部最小径は 3.8cm をはかる。内容物については赤外分光分析によりウルシオールが検出され、漆であることが判明した（藤根ほか 2023）。内容物の炭素 14 年代測定では、2 σで 600-651 年、1 σでは 606-626 年の範囲である可能性が高いという結果が得られた。頸部および

写真 2 新建遺跡採集瓶



第 3 図 新建遺跡採集瓶実測図

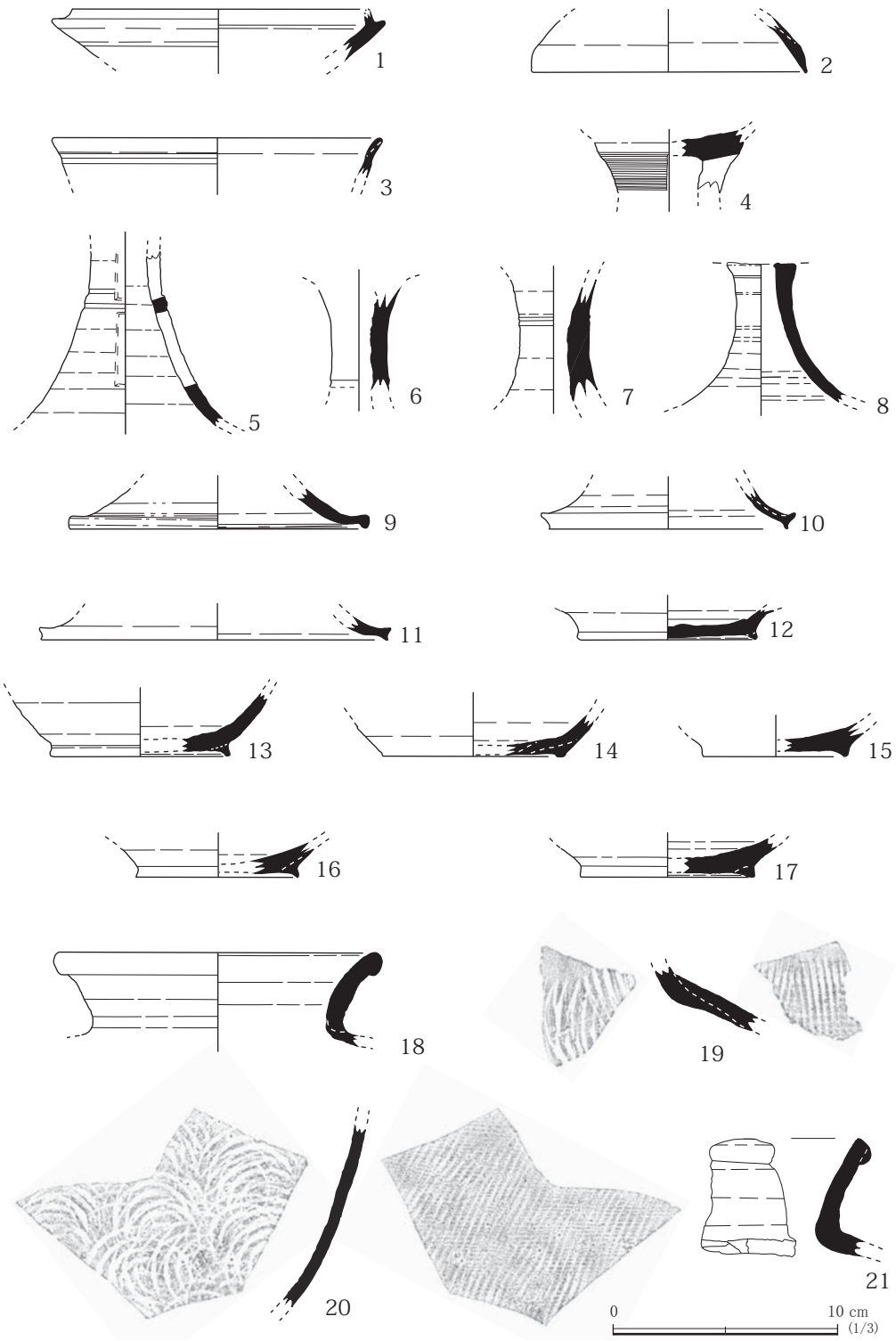


第 4 図　X 線 CT による瓹内部の画像
（瓹内容物の左半の白い粒が砂粒）

穿孔部から内容物を観察すると、穿孔部の下部付近まで漆が堆積していることがわかる。内容物の状態を探るため、CT スキャンによる撮影をおこなった（藤根ほか 2023）。これによると、内容物は純粋な漆だけでなく、底部付近に砂礫が堆積していることがわかった（第 4 図）。漆は頸部内面に付着しているが、画像をみると、瓹体部内面の上部にも漆が若干付着している。砂礫を含むものの、瓹体部の 1/3 ほどの量の漆がおさめられていることが判明した。

以下、採集された資料について記述する（第 5・6 図、写真 3 ～ 6）。

第 5 図 1 は蓋坏坏身の口縁部である。口縁部径は 14.7cm であり、受け部の窪みは浅く、内面がやや立ち上がる。2 は坏蓋の口縁部で、最大径 12.2cm をはかる。端部は緩い尖唇状となる。3 は、高坏の口縁部であろうか。口縁部径 14.7cm をはかり、上部が緩く外反し、端部は丸くおさめる。4 ～ 11 は高坏脚部である。4 は脚部上端と坏部の接合部分の破片である。透かしが施されている。比較的大型の個体であることから、長脚で 2 段の透かしが施されている可能性がある。脚部にはカキ目を施す。5 は脚部片である。2 段の透かしを有する。破片の両端において、下段の透かしが残っており、3 単位の間隔で透かしが施されていると判断される。6 は脚部上半部の破片である。破片下部に凹線が 1 条めぐる。7 は最小径 3.2cm であり、破片中央付近に凹線が 1 条めぐる。破片下端よりハの字状に外側に屈曲する。8 は破片上面に、坏部との接合面が残る。9 ～ 11 は脚部裾部の破片である。9 は裾部端部が下方に屈曲して成形されており、径は 13.4cm をはかる。10 の底部径は 11.3cm である。端部は強く屈曲している。11 の底部径は 15.4cm であり、端部はほぼ水平に広がる。12 ～ 17 は須恵器坏の底部であり、いずれも高台を有する。12 は、底部端



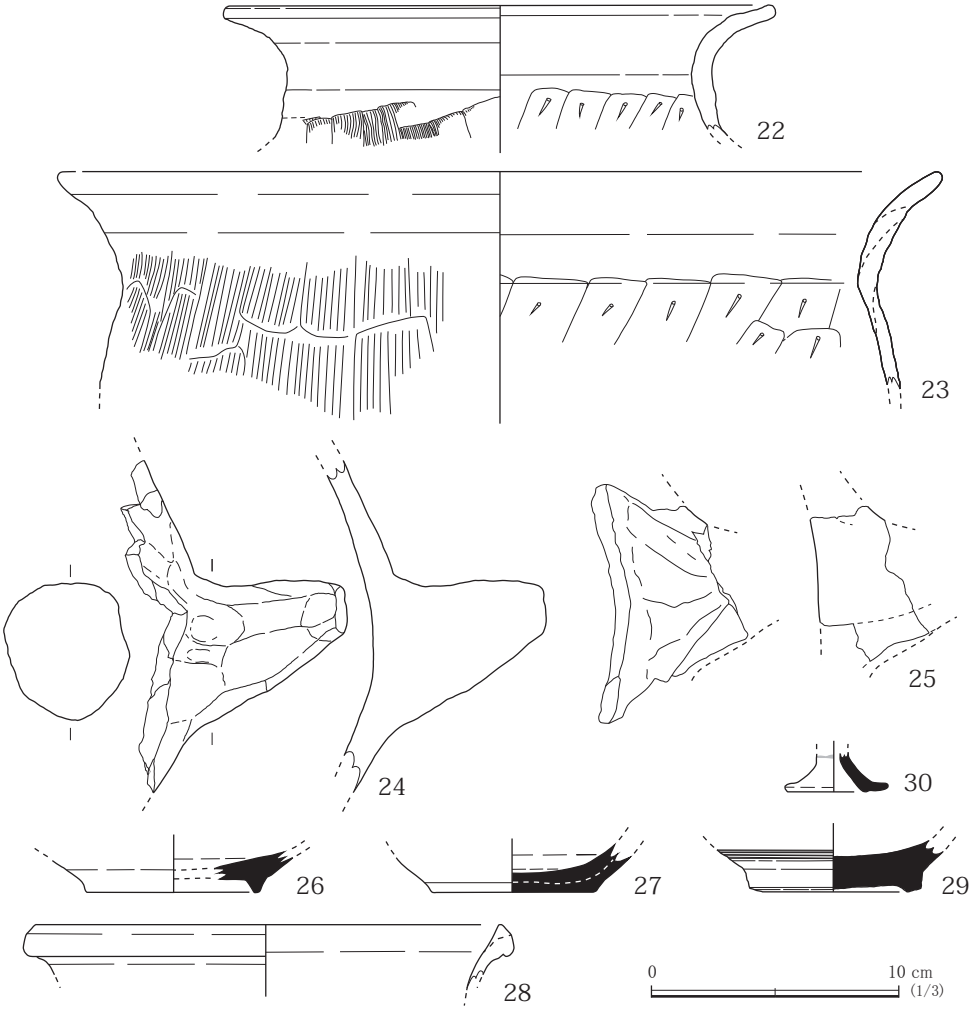
第 5 図　新建遺跡採集資料実測図（1）

に張り出すように低い高台が施されている。底部径は 7.6cm である。底部からの立ち上がりが外反する形状を呈している。13 は、外側にやや張る形で、断面逆三角形状の高台が貼り付けられている。底部径は 8.0cm をはかる。14 は底部径 8.0cm をはかる。15 は底部径 6.4cm をはかる。16 は底部径 7.2cm をはかる。外側にやや張る形で、断面逆三角形状の高台が貼り付けられている。17 は断面逆三角形状の高台が施される。小破片のため歪みがあるが、底部径は 7.7cm と復元した。18 は甕の口縁部で、径は 14.2cm をはかる。頸部が外反し、口縁部外面が肥厚する。19 は甕の体部上端から頸部にかけての破片である。20 は甕の体部である。このほかにも甕の破片が複数採集されている。21 は壺の口縁部であろうか。口縁部が肥厚し、体部内面に叩き目が施されていない。

第 6 図 22 は甕の口縁部片である。口縁部は外反し、内外面ともナデ調整が施されている。外面は頸部下部まで縦方向のハケ、内面は縦方向のヘラ削りが施されている。23 は口縁部から体部上端にかけての甑の破片である。外面には、口唇部直下まで縦方向のハケが施されており、ハケ目の幅は、2.3 ～ 2.4cm である。24・25 は甑である。24 は把手であり、外面の把手接合部には指頭圧痕が残る。内面はヘラ削りである。25 は把手の基部である。断面には把手の粘土塊を接合させた痕跡が残る。26 は土師質土器の底部である。高台が施され、底部径 6.4cm をはかる。27 は須恵質の土器の底部であり、底面には糸切痕が残る。底部径は 6.6cm である。28 は瓦質の甕の口縁部で、径は 20.0cm である。口縁部上端が肥厚し、端部断面は尖った形状をとる。29 は白磁碗の底部である。高台が作出され、径は 7.0cm をはかる。底面から 1.7cm の高さ以上の外面に釉が残る。このほか、極めて小さい破片であるが、青磁片も採集されている。30 は脚部であり、底部径 4.2cm である。破片上部に赤い釉薬が残る。

3．まとめと今後の展望

新建遺跡において採集された資料には、須恵器・土師器・瓦質土器・土師質土器・磁器などが認められた。時期的には、古墳時代後期から近世以降までの資料を含む。このうち、古墳時代須恵器については、昨年度報告した炭素年代測定法によって得られた結果と大きな齟齬はないものと考えられる。蓋坏坏身の形状や、2 段の透かしを有する高坏脚部が含まれていることを考慮すると、中村編年のⅡ型式 5 ～ 6 段階の資料が一定数含まれていることがわかる。しかしながら、須恵器には高台を有する坏などが含まれていることから、古代の須恵器も一定量存在している。また、土師器甑についても古代の資料である可能性がある。これら古代の資料に関しては、新建遺跡より北西に 2.4km の距離に位置する安芸国分寺などとの関連が注目される。漆の生産が古墳時代から継続するのか、また、何らかの生産遺跡として機能していたのかなど、当遺跡は古墳時代から古代にかけての社会変化の解明に寄与する可能性を有していると考えられる。



第 6 図　新建遺跡採集資料実測図（2）

遺跡の機能に関しては、資料採集者である吉井氏への聞き取りと採集時の記録によると、A 地点において須恵器を含む暗灰色砂粒混じり粘土層や赤色・灰黒色の互層の堆積が観察されたため、須恵器が窯跡出土資料ではないかと想定されている。資料を見た限りでは、窯体破片や窯跡出土をうかがわせる須恵器を確認できず、当遺跡が直ちに窯跡であると判断できる状態ではない。時期は異なるかもしれないものの、甑なども出土していることから、集落としてもとらえられる要素はあるが、採集された資料の中では須恵器の割合が非常に高いことから慎重に判断する必要があろう。今後、新建遺跡出土資料の検討、類例の収集、現地の踏査などによる確認作業を進めることによって当遺跡の性格を明らかにできると考えられる。

謝辞

新建遺跡採集の貴重な資料をご寄贈いただいた吉井宣子氏に改めて感謝申し上げます。資料採集時の詳細かつ的確な記録も、本報告において大変参考になりました。吉井氏の記録閲覧の際は、広島県立歴史博物館尾崎光伸氏にお世話になりました。新建遺跡および出土資料について、広島大学名誉教授藤野次史先生、広島大学教授野島永先生、比治山大学教授安間拓巳先生、（株）パレオ・ラボ藤根久氏よりご教示を賜りました。遺跡範囲など遺跡情報については、東広島市出土文化財管理センター石垣敏之氏・津田真琴氏にお世話になりました。本報告をまとめるにあたり、当部門教育研究補助職員時元省二氏には多大なご協力をいただきました。瓹・漆の分析については（株）パレオ・ラボ藤根久氏をはじめとする各氏、X線CTの撮影については奈良文化財研究所村田泰輔氏にご協力いただきました。末筆とはなりますが、記して感謝申し上げます。

引用文献

川島尚宗　2023「漆容器としての須恵器―東広島市新建遺跡採集資料の報告―」『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』第14号 45-48頁

藤根　久・伊藤　茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtatidze　2023「瓹底部黒色付着物の材質分析と放射性炭素年代測定」『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』第14号 49-53頁

1

2

3

4

5a

5b

6

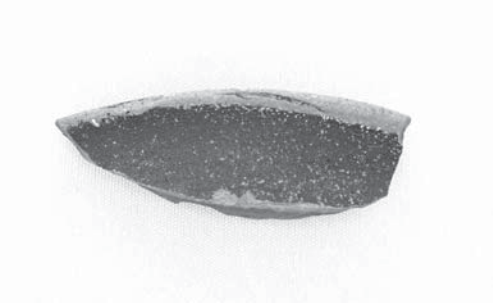
7

8

写真 3 新建遺跡採集資料（1）

9

10



11

12

13

14

15

16

写真 4 新建遺跡採集資料（2）

17

18

19

20

21

22

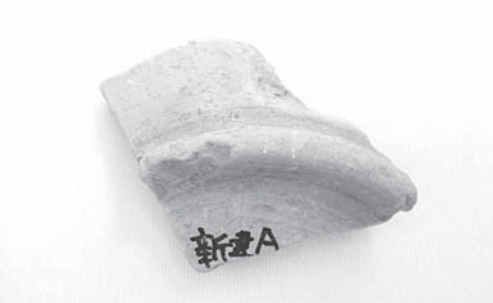
23

24

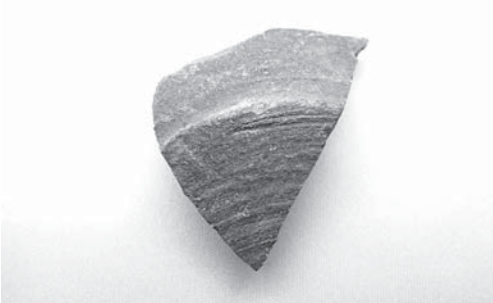
写真 5 新建遺跡採集資料（3）

25a

25b



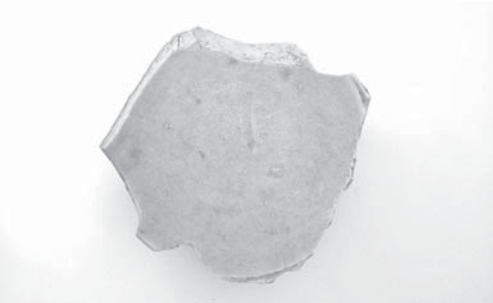
26



27

28

29a



29b

30

写真 6 新建遺跡採集資料（4）

第 1 表　新建遺跡採集資料観察表

no.	器種	部位	法量 (cm) ( ) 内は復元値	色調	備考
-	須恵器　瓏	体部	胴径 11.3, 残高 11.0	外 7.5Y7/1 ～ 8/1, 内 2.5GY7/1	紀要 14 参照
1	須恵器　坏身	口縁部	(口径 14.7), 残高 2.0	内外 5Y6/1	
2	須恵器　坏蓋	口縁部	(口径 12.2), 残高 2.3	内外 N7/0	
3	須恵器　高坏か	坏部	(口径 14.7), 残高 1.7	内外 5Y6/1	
4	須恵器　高坏	脚部	残高 2.7	内外 10YR6/1	透かし有
5	須恵器　高坏	脚部	残高 8.1	内外 5Y6/1	二段透かし有
6	須恵器　高坏	脚部	残高 4.4	外 2.5Y6/6, 内 5Y6/1	透かし有
7	須恵器　高坏	脚部	(裾径 15.4)	外 5Y6/1, 内 7.5Y7/1	
8	須恵器　高坏	脚部	残高 6.2	内外 5Y8/1	
9	須恵器　高坏	脚裾部	(裾径 13.4), 残高 1.8	内外 5Y8/1	
10	須恵器　高坏	脚裾部	(裾径 11.3), 残高 2.0	内外 5Y8/1	
11	須恵器　高坏	脚裾部	(裾径 15.4), 残高 1.0	外 10Y5/1, 内 7.5Y7/1	
12	須恵器　坏	底部	(底径 7.6), 残高 1.5	7.5Y7/1	
13	須恵器　坏	底部	(底径 8.0), 残高 2.7	5Y6/1	
14	須恵器　坏	底部	(底径 8.0), 残高 1.8	7.5Y6/1	
15	須恵器　坏	底部	(底径 6.4), 残高 1.5	5Y8/1	
16	須恵器　坏	底部	(底径 7.2), 残高 1.3	5Y8/1	
17	須恵器　坏	底部	(底径 7.7), 残高 1.3	10Y8/1	
18	須恵器　甕	口縁部 ～体部	(口径 14.2), 残高 4.3	2.5Y7.6	
19	須恵器　甕	体部	残高 2.8	5Y4/1	
20	須恵器　甕	体部	残高 8.3	2.5Y6/1	
21	須恵器　壺	口縁部 ～頸部	残高 5.2	N7/0	
22	土師器　甕	口縁部 ～頸部	(口径 22.0), 残高 5.3	2.5Y7/3	

23	土師器　甕 / 甑	口縁部 ～頸部	(口径 35.8), 残高 8.6	10YR7/4	
24	土師器　甑	把手	残高 11.5	外 10YR8/3, 内 7.5YR8/6	
25	土師器　甑	把手	残高 6.9	2.5Y7/3	
26	土師質　坏	底部	(底径 6.4), 残高 1.6	2.5Y7/2	
27	須恵質　坏	底部	(底径 6.6), 残高 1.9	N5/0	糸切り
28	瓦質	口縁部	(口径 20.0), 残高 2.7	外 7.5YR5/1, 内 5Y7/2	
29	白磁　碗	底部	底径 7.0, 残高 2.3	外 5Y8/2, 2.5GY7/1	
30	磁器	脚部	底径 4.2, 残高 1.7	外乳白色 , 内 5Y8/1	

A report of collected pottery found at the Shindate site, Higashihiroshima, Japan

Takamune Kawashima

The Shindate site is located at the eastern edge of the Saijo basin. Sue ware, haji ware, and some other pottery shards from later periods were collected at this site in 1994. A previous report revealed that *hasō*, a type of sue ware filled with lacquer belonged to the first half of the 7th century. This site contains pottery shards from later periods, such as the Ancient and Medieval periods. There are no other pottery shards which suggest lacquer production in the Late Kofun and the Ancient periods at this site. This site may have produced lacquer also in the Ancient period, as the Aki Kokubunji site, an ancient Buddhist temple, is located near the Shindate. The collector of these pottery shards assumes that this site was a sue pottery production site. As we do not have enough evidence for these scenarios, further investigation would be needed to clarify the character of this site.